様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１００３

研究課題名（和文）ナラティブ・ラーニングを応用した高度教職能力の開発に関する臨床教育学的研究

研究課題名（英文）Clinical-educational research on the development of highly qualified competencies of teachers by applying the concept of narrative learning

研究代表者
庄井　良信（Shoi, Yoshinobu）

北海道教育大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：００２０６２６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：フィンランドやリトアニアとの国際的な共同研究を継続的に展開し，日本における実践参画型のフィールドワークを継続し，ナラティブ・ラーニング（NLG）の基礎理論を構築した．最終的には，多くの現職教師教育の現場（教職大学院等）でも応用可能なNLGに関する典型モデルを臨床教育学の観点から構想し，大学院における高度専門職業人養成の臨床的なプログラムを開発し，北海道教育大学大学院学校臨床心理専攻における臨床生徒指導特論・演習のカリキュラム改善に活用することができた。また、その成果を学術論文や国際学会の発表等で広く社会に還元することができた.

研究成果の概要（英文）：I referred to the whole picture of the narrative learning project in Finland that applied to curriculum innovation for teacher education. Finally, I reflected our practices of NLG-oriented educational activity such as ‘narrative conference’ (NCM) that has been constructed and performed in the ‘Special Seminar of Student Guidance and Counseling’ at the Graduate Course of Education, Hokkaido University of Education.
Based on these comparative international joint-research between Japan and Finland, I inquired after a promising curriculum development to empower the highly qualified teachers’ general competences in the research field of “clinical psychology and school education” as an axis of curriculum for teacher education especially in the doctorate courses.

研究分野：臨床教育学

キーワード：ナラティブ・ラーニング　教師教育　臨床教育学　フィンランド　臨床的実践力

１．研究開始当初の背景

（１）現職教師教育のカリキュラム

内外の教師教育に責任を持つ大学・大学院では，社会に生きる子どもの変化や教科を支える学問分野の再編等の現代的諸課題に応じるために，教員養成の高度化が志向され，それに相応しい教員の養成・採用・研修システムの見直しが進められていた．その多くは，教員の自己学習支援カリキュラムの開発と不可分に進められようとしていた．多様な学習歴を持つ教師が，それぞれのライフステージで「理論と実践との高次の融合」をめざす実践を支援できる学習環境の在り方が厳しく問いなおされていたのである．

これまで，日本教育学会の特別課題研究をはじめ，日本の教育界では，教員の養成カリキュラム改革に関わる諸課題が検討されてきた．しかし，大学院レベルの現職教師教育改革のカリキュラムに関する研究は，必ずしも十分に展開されているとは言えない状況であった．また，現職教師教育の理念や制度に関する諸研究は，いくつか生まれているが，その臨床的・実践的カリキュラムの開発やその教育学的検討は，まだ十分に深められているわけではなかった．（日本教育学会・特別課題研究委員会研究報告書『現職教師教育カリキュラムの教育学的検討』*2011* 年）．

（２）ナラティブ・ラーニング

筆者は，これまで一貫して，学習指導における子ども理解と物語論的なアプローチを，臨床教育学の視点から探究してきた．一回性の自己物語を文化への参加を媒介に紡ぎ合う物語共同体や工房（*atelier*）モードの協同学習も，現場と共に構想しあった．（拙著『学びのファンタジア：臨床教育学のあたらしい地平へ』渓水社, *1996* 年）．その成果は，*ISCAR* という国際学会等でも発表し，その後，ヘルシンキ大学での長期在外研修（*1999* 年）や，同年，オウル大学で開催された国際会議でも発表し，ハッカライネン（*Hakkarainen*）博士との国際的な共同研究も始まった．その後の継続的な共同研究を進めるプロセスで生成したのが，ナラティブ・ラーニング（*narrative learning*）という学習援助のコンセプトであった．

一方，筆者は，*1999* 年から *2001* 年まで日本教育学会の課題研究委員会の一つであった「臨床教育学の動向と課題」の運営事務局を担当し，臨床教育学の視点から，現代社会における教師の専門性を問い直した．（『臨床教育学序説』柏書房，*2002* 年，共著）．学校教師の高度な職能開発については，*2002*～*2005* 年まで日本教育学会における特別課題研究委員会「教師教育の再編動向と教育学の課題」の構成員として参加し，日本学術振興会の科学研究費補助金の支援を受けた共同研究「臨床教育学の展開と教師教育の改革」の運営事務局も担当し，そのなかでもナラティブ・ラーニングの臨床教育学的な意義と可能性について考察してきた（『創造現場の臨床教育学』明石書店, *2008* 年, 共編著）．*2011* 年には，日本臨床教育学会の設立に事務局長として参画した．

（３）フィンランドの改革動向

国際的には，フィンランドにおける現職教師教育カリキュラムの思想と方法の検討も行ってきた（『フィンランドに学ぶ学力と教育』明石書店，*2004* 年，共編著）．*2008* 年～*2011* 年には，日本教育学会特別課題研究委員会「現職教師教育カリキュラムの教育学的検討」の運営事務局も担当し，ナラティブ・ラーニングと教師教育改革の可能性についても考察してきた．

以上のような，研究活動を背景に，申請者は，フィンランドと日本の共同研究によって開発されてきたナラティブ・ラーニング（*narrative learning: NLG*）の思想と方法を整理し，新たな高度専門職業人養成（教師教育）プログラムの臨床的な開発を行いたいと考えた．*NLG* の研究デザインは，子どもと教師と教師教育者が，「三位一体」で成長し合う生成的実験法であり，これを日本の教師教育カリキュラム開発という文脈でさらに洗練できると考えたからである．

２．研究の目的

本研究の目的は，過去 *15* 年間にわたりフィンランドと日本の共同研究によって開発されてきたナラティブ・ラーニング（*narrative learning: NLG*）の思想と方法を理論的に整理し，両国の事例省察記録と，その履修体験者への半構造化面接記録に基づいて，その教師教育における意義と役割を，臨床教育学の視点から明らかにすることであった．そのことを通して，今日，喫緊の課題である大学院における高度専門職業人養成（教師教育）プログラムの臨床的な開発に貢献したいと考えた．

具体的には，過去 *15* 年間に，フィンランドとの共同研究で蓄積してきた *NLG* の映像記録と，教師教育の当事者（子ども・学生・大学教員）への聴きとり記録（音声記録）等をトランスクリプションに変換し，それらを臨床教育学の視点から基礎データとした上で，*NLG* の教師教育カリキュラムにおける意義と可能性に関する理論仮説（生成的問い）を構築したいと考えた．

次に，本研究期間の３年間で，日本の研究協力校へのフィールドワークを実施しつつ，フィンランドのオウル大学教師教育学部，ロシアのモスクワ大学（*MSUP*）等との国際的な共同研究を，インターネット上での双方向遠隔動画配信による研究協議や，現地調査での資料蒐集や参与観察を通して，多くの現職教師教育の現場で応用可能な *NLG* の国際基準での典型カリキュラムを臨床教育学の観

点から構築したいと考えた．そのことを通して，教育系大学院教育カリキュラムの一つのモデルを提供したいと考えた．

３．研究の方法

第１期（平成 26 年度）には，ナラティブ・ラーニング（NLG）が現職教師の高度な職能開発に果たす意義と役割に関する理論仮説（生成的問い）を構築した．

第２期（平成 27 年度以降）には，本学が研究協力協定を締結しているオウル大学教師教育学部との共同研究を展開しつつ，第１期に構築した NLG の理論仮説に基づいて，北海道における研究協力校（大都市と地方都市）や広島県の公立小学校への NLG の参与観察や，本学大学院を修了した現職教員との NLG プロジェクトを実施した．

最終的には，多くの現職教師教育の現場でも応用可能な NLG の国際基準の典型モデルを臨床教育学の観点から構築し，そのカリキュラム改善に貢献しようと考えた．

４．研究成果

初年度は，本研究に関する基礎データを整理し，理論的な基礎づけを行う．具体的には，フィンランドのオウル大学で Hakkarainen 博士らの研究グループと共同研究で蓄積してきたナラティブ・ラーニング（NLG）の記録及び，教師教育の当事者（子ども・学生・大学教員）へのインタビューデータ等を精査し，NLG 研究の第 1 次的な基礎データの編纂と整理を行った．

この作業と並行して，フィンランドにおける NLG に関する諸文献の翻訳も遂行する．その上で，ナラティブ・ラーニング（NLG）の教師教育カリキュラムにおける意義と可能性に関する第 1 次的な理論仮説(生成的問い)を構築する．NLG に関する国際的な共同研究の環境を整備した．具体的には，フィンランドのオウル大学，リトアニアのヴィルニュス大学等との国際的な共同研究体制の基盤を構築した．そのために，インターネット回線を使った対話的研究交流等も推進した．また，国内でも，NLG の理論構築を志向した実践参画型のフィールドワークを実施した．

これらの活動に必要な資料蒐集（第１期）を実施し，現職教師教育カリキュラムに関する内外の研究文献・資料の蒐集と整理を行った．また，ナラティブ・ラーニング（NLG）に関する内外の研究文献・資料の蒐集・整理も行い，本研究の基盤となる理論の整理を行った．以上の作業をとおして形成される NLG に関する第 1 次的な理論仮説にもとづいて，2014 年 10 月にオーストラリアで開催された国際会議（4th International Congress of ISCAR）において Narrative Conferences: As an atelier with “perezhivanie” for childhood educators というテーマで研究発表を行った．それを契機に，NLG に関する国際的な共同研究に関する新たな環境を強化することができた．

2 年目は，初年度に整理・編纂した基礎データ及び第 1 次理論仮説にもとづいて，学校現場における実践参画研究活動を遂行し，第 2 次理論仮説を構築した．具体的には，広島市立の公立学校の臨床教育学的な授業研究のプロセスに共同参画しながら，ナラティブ・ラーニングのコンセプトとその具体的な実践像を探究した．その過程で，フィンランド，カナダ等と，国際的な共同研究体制を展開し，理論的・実践的な基礎理論を探求・精査した．

この作業と並行して，フィンランドにおけるナラティブ・ラーニング（以下，NLG と略す）に関する文献の翻訳を進め，その成果をオウル大学の研究フォーラムや，全国規模の学会等で発表した．そのことをとおして，NLG の教師教育カリキュラムにおける意義と可能性に関する第 2 次的な理論仮説を構築した．また，NLG に関する国際的共同研究の環境を整備し，その成果を発表するための基盤を構築した．

また，これらの活動に必要な資料蒐集（第２期）を行い，現職教師教育カリキュラムに関する内外の研究文献・資料の蒐集・整理を継続的に遂行した．また， NLG に関する内外の研究文献・資料の蒐集・整理も継続し，本研究の基盤となる理論の骨子を構築した．そのために，フィンランドのオウル大学教育学部・大学院（修士課程及び博士課程）への現地調査と研究協議を行い，NLG に関する第 2 次的な理論仮説を，国際的な基準で精査した．

それと並行して NLG に関する国際的な共同研究の環境も整備した．具体的には，昨年度に構築したフィンランドのオウル大学教育学部及び大学院修士課程・博士課程との共同研究体制を整備し，現職教師教育カリキュラムにおける NLG の教育的意義を考察する国際的な研究環境を整えた．また，リトアニアで展開されている NLG の実践研究に関するデータを共有する準備も整えた．国内では，NLG を志向した臨床教育学的な授業研究フィールドワークを，広島市立の公立学校の協力を得ながら４回実施することができた．

これらの成果は，2015 年 9 月 20 日に信州大学で開催された日本教師教育学会第２５回研究大会課題研究において「リサーチベースの大学院教育デザイン：フィンランドの教師教育者の語り（ナラティブ）を参照枠として」というテーマで，2015 年 10 月 11 日に岩手大学で開催された日本教育方法学会第６１回大会課題において「研究擾乱のナラティブから高度実践構想力へ：教師への育ちを支える教育方法学の役割」というテーマで発表することができた．

最終年度は，2 年間で構築した第 2 次理論仮説にもとづいて，フィンランドやリトアニ

アとの国際的な共同研究を継続的に展開し，日本における実践参画型のフィールドワークを継続し，ナラティブ・ラーニング（NLG）の基礎理論を構築した．

最終的には，多くの現職教師教育の現場でも応用可能な NLG に関する典型モデルを臨床教育学の観点から構想し，大学院における高度専門職業人養成（教師教育）の臨床的なプログラムを開発し，その成果を学術論文等で公刊した．また，その成果は，2017 年 9 月にカナダで開催される ISCAR 等や，10 月に開催される日本教育方法学会，日本臨床教育学等，内外の諸学会等で発表する準備を整えることができた．

また最終年度は，これらの活動に必要な資料蒐集（第 3 期）を行い，教員養成及び現職教師教育カリキュラムに関する内外の資料とその精査を継続した．また，NLG に関する内外の資料蒐集とその精査も継続し，本研究の最終成果となる基礎理論を構築した．そのために，フィンランドとリトアニアへの現地調査と研究協議を継続した．

この過程で，ナラティブ・ラーニング（NLG）の教員養成及び現職教師教育カリキュラムにおける教育学的な意義に関する最終的な基礎理論を構築した．また，NLG に関する国際的な共同研究の環境を深化させ，インターネット回線を使った対話的研究交流等を継続的に推進する環境を再構築することもできた．また，国内でも，NLG ベースの実践参画型のフィールドワークを継続実施し，本課題の研究成果を，北海道教育大学附属札幌小学校をはじめ，研究協力校や教師教育の現場にも還元することができた．

これらの 3 年間の一連の研究活動の成果として，教員養成系大学院修士課程及び博士課程の高度専門職業人養成（教師教育）において，学校臨床心理領域を機軸としたカリキュラム構想の端緒をつかむこともできた．

国際的な教育政策では，こうした問題状況を解決するために，あるいは経済をある種の「好循環」に誘導するために，多文化共生社会や持続可能社会などの現代的課題が希求され，そのために必要な人間の資質能力（コンピテンシー）の形成が，教育課題として問い直されようとしている．実際，いま進められている学習指導要領の改定作業でも，こうした政策課題を強く意識して「育成すべき資質・能力」の精査が進められている．文部科学省においても，問題解決能力や協働性・自律性の形成，教科間の区別を超えた汎用的な能力やスキルの育成が議論されている．そのなかには，産業界の一部からの要請が強い汎用的コンピテンスも含まれている．

これらの社会状況の変化や国家レベルの政策動向を注視し，多くの大学で，主に次の二つの機軸（pivot）のもとに，大学院教育カリキュラムの改革が構想されていることがわかる．一つは教科内容学や教科教育学の構想のように，既存の文化・学問領域の再編を含む視座をもって，教科指導と人間形成の専門性を高めようとする機軸である．もう一つは臨床教育学の構想のように，人間発達に関する諸科学（教育学・心理学・福祉学等）の領域横断という視座をもって，生徒指導・教育相談・キャリア教育・教科教育（授業）における総合的な人間発達援助の専門性を深めようとする機軸である．

前者は，主として「文化と教育内容」の開発という視座から子どもの「発達と教育」を探究しようとする機軸であり，後者は，主として子どもの「発達と教育」の論理を探究する視座から「文化と教育内容」の開発に貢献しようとする機軸である．両者は，教員養成・現職教育に責任を担う大学・大学院カリキュラムにおいて，欠かすことのできない 2 つの支柱であったし，今後もそうあり続けることが推察される．

最後に，物語を紡ぎ合う学習（narrative learning：NLG）が，教員養成系の大学院教育カリキュラムの改革にどのような可能性を有しているのか，という問いに立ち返って本研究の成果を省察してみたい．

一般に，ナラティブ・ラーニング（NLG）は，虚構場面を伴うプレイワールド（演劇空間）において，そこに参加する人びとが，それぞれの自己物語のプロットを，文化の探索と創造という物語のプロットに投影しつつ，共に新たな意味を創造し合う学習活動である．NLG を組織する教師教育者（大学教員）は，安心と安全が保障された虚構の演劇空間（play world）を準備し，ある人間が，ある物語文化と出会うなかで紡ぎだされる自己物語を傾聴し，その物語を聴き合い，語り合いながら，その人にとっても，他の人にとっても意味のある世界を協働で創り合うことをめざして，その活動に参加する．

NLG において教師教育者には，虚構の演劇空間において，ある文化と出会って協働で生成されるストーリーの参加者であることが求められる．それと同時に，教師教育者には，その多声楽的に生成されるストーリーの演出家であることが求められる．さらには，それらをメタ認知し，人間発達援助というドラマの総合監督になることも期待されているのである．NLG という学習環境において，教師教育者は，ある文化のプロットに触れて，それぞれの自己物語を紡ぎあう学習活動の構築に，みずから参加し，その活動を演出し，その演出活動全体を俯瞰して自己の教育活動（教師教育実践）を省察する．したがって，NLG において教師教育者は，子どもの視点に立つこと，教師又は教育実習生（大学院生）の視点に立つこと，そして教師教育者の視点に立つことを，同時に求められるのである．これをハッカライネンは，三位一体の教師教育論と意味づけている．

また，NLG は，多文化共生を志向し，ユニバーサルデザインのある学習活動を通して，総合的な人間発達援助を遂行しようとして

いる．それは，ハッカライネンによれば，人間発達のホリスティックな援助の省察に繋がるということである．その意味では，NLG は，臨床教育学におけるナラティブ（語り／物語）という哲学的・思想的な概念を，学習活動を通した人間発達援助実践のコンセプトとして具現化したものだということができる．

NLG は，単なる学習支援の方法ではない．また，それは，単に他者のナラティヴ（物語／語り）から学ぶ方法でもなければ，何かのナラティヴ（物語／語り）を教材に，ナラティヴ（物語／語り）を織り交ぜて学びを組み立てる方法でもない．たしかに，MLG は，子どもの遊びから学びへの移行支援カリキュラムの開発や，多様な特別なニーズをもつ子どもが，安心して仲間とともに学び合えるインクルーシブな学び合いや，子どもの生活感情に根ざした学習動機を文化創造へひらく学び合いにも深い示唆を与えてくれる可能がある．　また，NLG に関する日芬の共同研究の成果は，次のような臨床教育学的探究へと結晶していくことが期待できる．

1 つには，かけがえのない子どもの人生（ライフ）そのものに寄り添い，そのよりよきパートナーであることを志向する発達的教育（developmental education）とは何か，という教育哲学の問いである．2 つには，その原理を具体的に実現していくための発達的カリキュラム（developmental curriculum）を，だれが，だれのために，どのような目標と方法のシステムで構成すべきなのか，という教育内容・方法学の問いである．3 つには，そのシステムに相応しい評価，すなわち，子どもと子どもに関わる人びとが，自己のアイデンティティを構築しながら，ある社会・文化において自分らしく生きることを励ませるような質的・発達的評価（developmental evaluation）とは何か，という教育評価論の問いである．

もとより，NLG は，現代の教育問題を解決するための即効薬でもなければ万能薬でもない．海外におけるユニークな方法の無批判な移植は，厳に戒められなければならない．今後は，このプロジェクトの研究デザインと，臨床教育学が重視しようとしているコミュニティ・エンパワーメントの枠組みとの接合を図りながら，いま展開しつつある私たちの臨床教育学のオリジナルな地平を開拓していきたい．そのことを通して，フィンランドにおけるもう一つの教育改革への試みが，日本に生きる私たちとって持つ意味をさらに深く探索し，日本における教師教育実践の新たな地平を構想していきたい．

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① 庄井良信「学校臨床心理領域を機軸とした教師教育カリキュラムの開発：ナラティブ・ラーニング（NLG）の潜勢力」北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻『学校臨床心理学研究』第 14 巻，2017，3-18，（査読無）．

② 庄井良信，柴田浩一，阿部真利恵，坂田百合那，田爪まどか，土井伸也，渡部良子「アンリ・ワロン（H. Wallon）の古典講読：多職種協働を支援する多声楽的意味生成の試み」北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻『学校臨床心理学研究』第 14 巻，2017，27-39，（査読無）．

③ 庄井良信「高度な専門的教養と洗練された臨床的実践力」北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻『学校臨床心理学研究』第 14 巻，2017，1-2，（査読無）．

④ 庄井良信「子どもと出会い直すということ：臨床教育学の視界から」北海道子ども学会編『子どもロジー』vol. 20, 2017, 8-17. （査読無）．

⑤ 庄井良信「フィンランドの教師教育」日本教師教育学会編『教師教育研究ハンドブック』学文社，2017, 50-53，（査読無）．

⑥ 庄井良信「『チーム学校』への叡智（フロネーシス）を磨く」北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理専攻『学校臨床心理学研究』第 13 巻，2016，1-2，（査読無）．

⑦ 庄井良信「教育方法学におけるナラティブ・アプローチ」日本教育方法学会編『教育方法学ハンドブック』学文社（第 50 回大会記念特集号）2014，58-63，（査読有）．

〔学会発表〕（計８件）

① Yoshinobu Shoi. Narrative Learning and Agenda of Educational Reform in Japan: As a first step to fruitful research collaboration. International Conference on "Narrative Learning". Lithuanian University of Educational Sciences. 2017/03/28. Lithuania.

② 庄井良信「対話と協働から深みのある学びへ：上ノ国におけるカリキュラムマネジメントの新たな可能性を求めて」北海道上ノ国町学校教育研究会，2017 年 2 月 20 日，北海道檜山郡上ノ国町．

③ 庄井良信「子どもと出会い直すということ：臨床教育学の視界から」北海道子ども学会第 20 回年次研究大会，2016 年 9 月 3 日，北海道文教大学．北海道江別市．

④　庄井良信「北海道における『学力』の創造と諸問題：臨床教育学とナラティブの視界から」北海道教育学会第 60 回大会，北海道教育大学，2016 年 3 月 5 日，北海道札幌市．

⑤　庄井良信「擾乱のナラティブから高度実践構想力へ：教師への育ちを支える教育方法学の役割」日本教育方法学会第 51 回大会，岩手大学，2015 年 10 月 11 日，岩手県盛岡市．

⑥　庄井良信「発達援助における情動・感情の問題–発題へのヴィゴツキー理論からのアプローチ」日本臨床教育学会第 5 回研究大会，北海道教育大学，2015 年 9 月 27 日，北海道札幌市．

⑦　庄井良信「リサーチベースの大学院教育デザイン：フィンランドの教師教育者の語り（ナラティブ）を参照枠として」日本教師教育学会第 25 回研究大会，信州大学，2015 年 9 月 20 日，長野県松本市．

⑧Yoshinobu Shoi, Narrative Conferences: As an atelier with perezhivanie for childhood educators. 4th International Congress of ISCAR, Gold Members Room in ANZ Stadium in Sidney, 2014/10/02, Australia, Sidney.

〔図書〕（計２件）

①　勝野正章・庄井良信『問いからはじめる教育学』有斐閣，2015 年．第 1 章（2-14），第 3 章（28-42），第 4 章（43-57），第 9 章（118-129），第 10 章（130-144），第 11 章（145-160）及び第 13 章（173-182）．
②　庄井良信『いのちのケアと育み–臨床教育学のまなざし』かもがわ出版，2014 年，単著、総ページ数 151．

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

庄井　良信（Shoi　Yoshinobu）
北海道教育大学大学院・教育学研究科・教授
研究者番号：００２０６２６０